大学教育と社会人特別選抜
－福島大学夜間主コースを中心として－

高　尾　公　矢
(聖徳大学)

1　はじめに

社会人の学習要求の高まりのなかで，大学側の受け入れのあり方も多様化し，従来，社会人学生の教育を主として担ってきた国立大学の夜間学部が，「昼夜開講制の夜間主コース」として改組し，社会人を受け入れる動きが活発化している。

この動きの背景には，企業や官庁などの土曜日をはじめとする休日の増加，フレックス・タイム制の導入など社会人にとって大学に通学できる環境が整ってきたこと，その逆機能として「夜間学部」の社会人学生の減少がある。

夜間主コースはおおむね次のような特徴をもっている。①昼間主コースも夜間主コースも同じ学部組織と講師陣で教育にあたり，卒業後の履歴書上の扱いも昼間主コースと区別されることはなく，②一定の単位数を昼間主コースの授業に転換することが可能で，卒業最低年数が4年になり，③学費が昼間主コースの約半額であること。

福島大学は夜間主コースで社会人特別選抜を実施，社会人教育に積極的に取り組んでいる。

本稿では，福島大学行政社会学部夜間主コースの社会人特別選抜による入学生を対象とした調査をもとに，入学の理由，入学前の心配事，入学後の問題点，大学教育に対する満足度などを検討し，今後の社会人教育のあり方を考察する。

2　社会人特別選抜

福島大学行政社会学部は昭和63年から社会人を特別選抜で受け入れている。学部は行政学科と応用社会学の2学科で構成，「昼間主コース」と，「夜間主コース」に分かれ，夜間主コースだけが社会人特別選抜を実施している。

行政学科は，行政担当者や企業の担い手を養成することを目的とし，応用社会学科は，地域社会の行政，福祉，教育，文化，マスコミ等で活躍する人材を養成することを目的としている。

夜間主コースの授業時間帯は，月～金曜日18：00～21：10の2時限，土曜日13：00～19：50までの4時限。なお，昼間主コースは，土曜日閉校となり，夜間主コースのための曜日にあてられる。

夜間主コースの卒業必要単位数128のうち，昼間主コースの取得可能単位数は30である。(1)

社会人特別選抜の定員は，夜間主コースの半数を社会人が占めるように枠が設けられ，行政学科20名以内，応用社会学科10名以内の計30名以内である。出願資格は，次のいずれかに該当する者(主婦を含む)。①大学入学資格を有し，満23歳に達し，5年以上の社会人としての経験を有する者。②高校を卒業，または高校の定時制，通信制課程を卒業見込みの者で，現に就業し，入学後も就業を続ける意志を持つ者。受験資格から社会人を限りなく幅広く受け入れようとする姿勢が伺える。

選考は，小論文，面接，および出身学校長作成の調査書，志願調書，志願理由など。

特別選抜の競争率は（表1），年度別に差はあるが，過去6年間で最低は1.1倍，最高は2.3倍，平均は1.8倍であり，夜間主コースの一般入試の競争率が3倍程度であるから競争率はかなり低い。

表1　社会人特別選抜の状況

年　次	志願者数	合格者数	倍率
昭和63年	69（15）	30（10）	2．3
平成元年	30（　8）	28（　8）	1．1
平成2年	59（16）	34（11）	1．7
平成3年	61（17）	34（15）	1．8
平成4年	69（30）	36（20）	1．9
平成5年	71（40）	36（24）	2．0

（　　）は女子で内数、倍率は合格者/志願者

3　調査方法とサンプルの特性

調査は，平成５年９月～10月にかけて行政社会学科に在籍する社会人特別選抜での入学生を対象として，フェースシートを含み25項目からなる調査票を作成，講義・ゼミで配布し，無記名で回収を行った。有効回収数は101(回収率は73.7%)であった。

回答者の属性（表２）は，男43名（42.6%），女58名（57.4%）。年齢別では，20～24歳（42.6%），25～29歳（22.8%）と30歳以下が全体の65%を占め，30～34歳（10.9%），35～39歳（8.9%）と30歳を境にして，漸次減少の傾向を示す。平均年齢は29.2歳（男29.3歳，女29.2歳）であった。

表２　回答者の属性

年　齢	男	女	計
２０～２４歳	１９(44.2)	２４(41.4)	４３(42.6)
２５～２９歳	９(20.9)	１４(24.1)	２３(22.8)
３０～３４歳	４(9.3)	７(12.1)	１１(10.9)
３５～３９歳	６(14.0)	３(5.2)	９(8.9)
４０～４４歳	１(2.3)	５(8.6)	６(5.9)
４５歳以上	４(9.3)	５(8.6)	９(8.9)
計	４３(42.6)	５８(57.4)	１０１(100.0)

(　　)は%

専攻別では行政学科60名（59.4%），応用社会学科41名（40.6%）とやや応用社会学科が多い。

学年では１年35名（34.7%），２年（24.8%），３年（17.8%），４年（22.8%）とやや１年生が多く，３年生が少ない。

入学前の学歴は，高卒（普通科）59名（58.4%），高卒（職業科）12名（11.9%），専門学校および大卒が22名（22.8%），それ以外は短大卒６名（5.9%），高専卒１名（1.0%）である。

4　入学の理由

一旦社会に出た人が社会人特別選抜の存在を知るきっかけとなった情報源は，

「先輩・友人・知人の紹介」が49.5%を占め，次いで「報道機関」23.8%，「広報紙」13.9%，「出身高校の紹介」12.9%，「受験情報誌」11.9%とパーソナルな情報取得の比率が，マス・メディアによる情報取得を遙かに凌いでいる。

もし仮に福島大学に社会人特別選抜制度がなかったら，一般入試に応募したかという問いに，「応募した」19.8%，「応募しなかった」79.2%，社会人の多くが特別選抜制度に大学入学への期待を賭けている。

もしも特別選抜で学ぶ機会がなかったら（複数回答），「そのままあきらめていたと思う」が43.6%と半数近くを占めるが，一方で「大学の通信教育で学んでいたと思う」が36.6%，「大学の公開講座等で学んでいたと思う」16.8%，「福島大学の夜間主コース（一般受験）で学んでいたと思う」15.8%，「大学の聴講生になっていたと思う」9.9%，「各種学校で学んでいたと思う」9.9%，「放送大学で学んでいたと思う」8.9%と大学に対するニーズがきわめて高く，なかには他大学の社会人入試の受験経験をもつ人もいる。

社会人がなぜ夜間主コースを目指すのか。企業，役所，看護婦等の専門職の人たち，あるいは主婦が夜間主コースに入学する理由を提示し，4段階の尺度で回答を求めた。

その結果（表3），肯定の比率（“非常に重要”“割合重要”の比率の和）が最も高かったのは「自分の将来の可能性をのばすため」91.1%で，次いで「人と知り合い世界を広げる」90.1%，「以前から大学で学びたいと考えていた」83.1%，「社会の変化に対応できる知識・技術を得るため」71.3%，「現在の専門に更に役立つ知識をつけるため」68.3%など自己の可能性や自己啓発に関する事柄の比率が高く，反対に「将来の昇進のため」10.9%，「勤務先（職場）からの要請のため」12.9%，「転職をするため」28.4%，「学歴（学士）を得るため」35.7%など職業に関する事柄は低い。

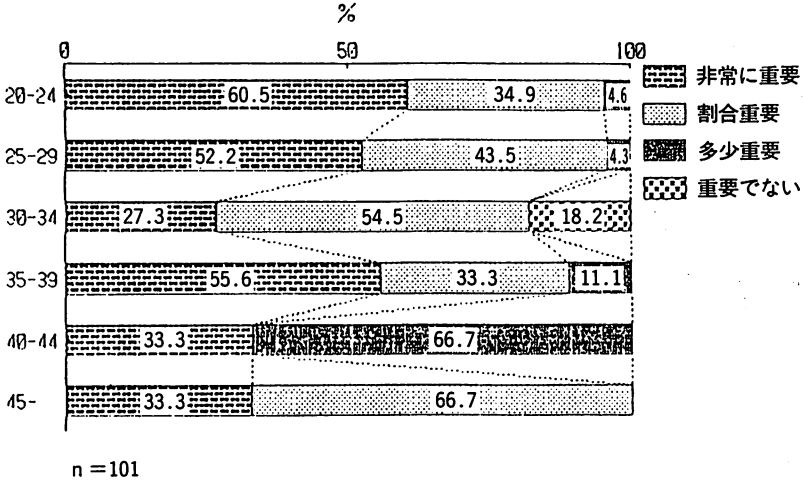
年齢別に入学理由は違いがみられ，「人と知り合い世界を広げる」は（図1），30歳以下と30歳後半に高く，「人生の転機（現状からの脱皮）」は（図2），20歳後半と30歳後半に高くなるという特徴がある。30歳頃の状況は，家族生活や職場の対人関係や，仕事そのものへの自分の対応を見なおす時期であって，自分の「夢」や「野心」の実現に向かって自己を再形成していくプロセスにある。その時期に日常の生活に流されるのではなく，安心して付き合える相談相手を求めて，あるいは人生の転機（現状からの脱皮）を賭けて大学の門をくぐる。だから，「より一層社会に役立てる力をつけるため」は（図3），30歳後半頃から重視される。

表3　入学の理由

目　　的	非常に重要	割合重要	多少重要	重要ではない	計
学歴を得るため	11.9	23.8	27.7	36.6	100.0
現在の専門・仕事に役に立つ知識	40.6	27.7	20.8	10.9	100.0
自分の将来の可能性をのばす	50.5	40.6	5.9	3.0	100.0
転職をするため	5.6	22.8	27.7	42.6	100.0
社会に役立てる力をつける	29.7	37.6	23.8	0.9	100.0
人と知り合い世界を広げる	50.5	39.6	7.9	2.0	100.0
希望していた専攻分野があった	19.8	47.5	24.8	7.9	100.0
人生の転機とする	32.0	21.8	31.7	13.9	100.0
大学で学びたいと考えていた	55.4	27.7	11.9	5.0	100.0
自分の目的がはっきりしてきた	21.8	29.7	34.7	13.9	100.0
将来の昇進のため	2.0	8.9	36.6	56.5	100.0
社会の変化に対応できる知識	33.7	37.6	24.8	4.0	100.0
勤務先からの要請のため	3.0	9.9	86.1	1.0	100.0

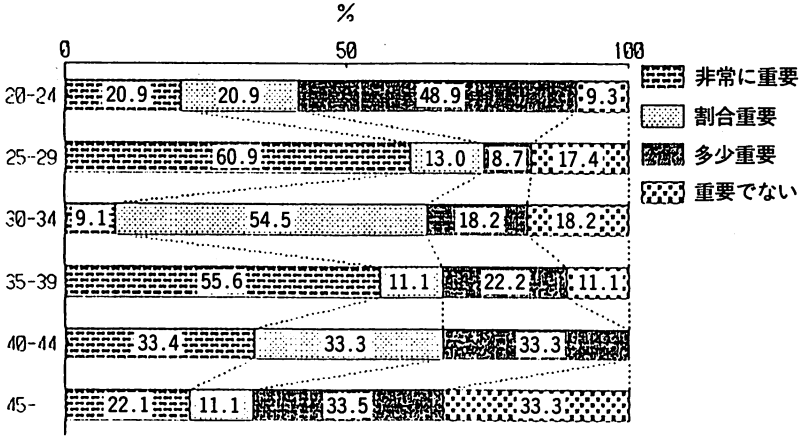
（単位：%、無回答は除く）

図1　年齢×入学理由（人と知合い世界を広げる）



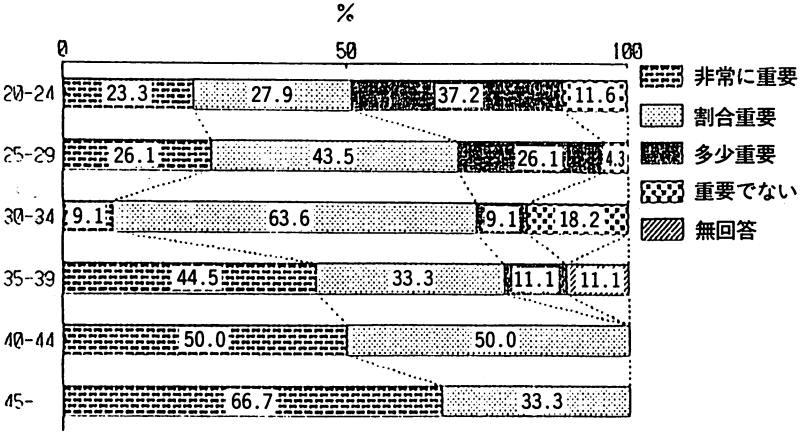
n＝101

図 2　年齢×入学理由（人生の転機とするため）



n＝101

図 3　年齢×入学理由（社会に役立つ力をつけるため）



n＝101

大学への入学を決心するときは，「大変だった」37.6%，「簡単だった」62.4%で大変だった比率は相対的に低いが，その理由の多くは，仕事との両立に対する不安である。

大学への入学を具体的に考えていたとき，「相談をした」64.4%，「相談しなか

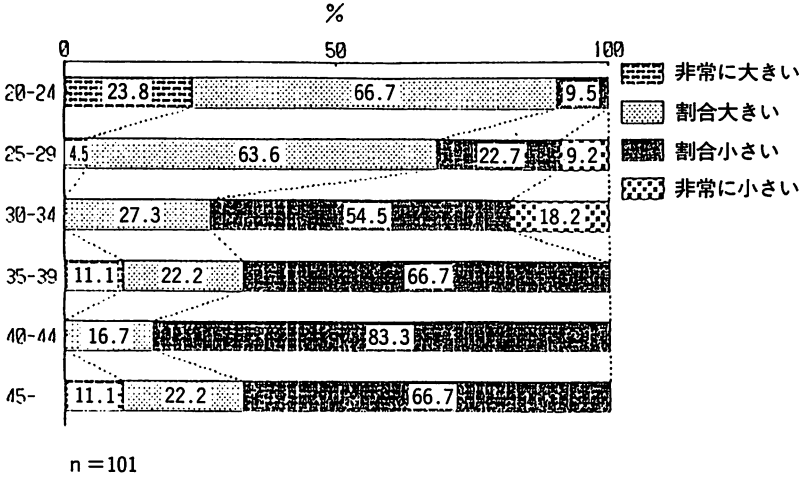
った」35.6%，相談した相手は会社の上司と家族が大半を占める。

大学への受験準備は（複数回答），「とくに準備しなかった」22.8%で大半が何らかの準備をしており，「会社（職場）との折衝」が45.5%と高い割合を占め，次いで「家族への説明」37.6%，「受験勉強」25.7%，「勉学のための資金調達」14.9%で，社会人特別選抜ということもあるが受験準備の大部分が勉強以外の大学で学ぶための障壁の除去にあてられている。

大学へ入学したいと考えるようになったのはいつ頃か，「福島大学社会人特別選抜を知ってから」が58.4%，「以前から」35.6%と特別選抜制度がきっかけとなっていることは事実であるが，就職後きわめて早い時期に（2年～3年後）大学への入学を考えているようである。社会人入試を考えるようになった理由をみると，大きく二つのタイプに分れる。高校の現役時代に進学を目指したが，「経済的理由」「学力の問題」などで大学入学が果たせなかったタイプと社会人として働きながら大学教育に目覚めるタイプである。前者は就職後早い時期に決意するが，後者は「仕事をしていて基礎的な学問が不足していることに気づいた」「ものの考え方が固定化してきたため」「海外で仕事をしているときもっと学んでおけばよかったと思った」など社会に出て様々な問題にぶつかって大学への入学を決意するので年齢的にはやや遅れる。

大学で学ぶためにかかる費用（授業料）は，「非常に負担は大きい」12.9%，「割合負担は大きい」49.5%と6割以上が何らかの負担を感じており，一方，「割合負

図4　年齢×費用負担（授業料）



n＝101

担は小さい」31.7%，「非常に負担は小さい」4.0%である。

年齢別には違いがみられ(図4)，20～24歳と25～29歳に負担に感じる比率が高く，30歳以上になると負担に感じる比率が低くなる。しかし，入学者が30歳以下の層に集中し，その層が負担を強く感じているのであるから授業料や奨励金等に対する援助システムのあり方を検討する必要があるだろう。

大学の学費をどのように捻出しているか，「現在の収入のなかから」86.1%で圧倒的多数を占め，「今までの貯蓄から」26.7%と現在の収入と貯蓄から捻出している。なかには「金融機関のローン」もわずかではあるが利用されている。

5　なぜ大学なのか

なぜ，他の教育機関，例えば一般の専門学校，カルチャーセンターではなく，大学を目指すのかを自由記述で尋ねた。「授業料が安かった」「学士が得られる」「大学院への進学が可能」「かつて大学入試に失敗して就職したために，大学に入りたかった」「大学以外のカルチャーセンターでは趣味を満足させる程度と感じたため」「カルチャーセンターで学んでいたが，一貫性がなくもの足りなかった」「幅広い知識を身につけたかった」「看護大学の教師になるためには学士が必要」「大学へ通学するなら職場で認められるが，それ以外は歓迎されない」など。

入学理由では，学歴の取得は重視されなかったが，他の教育機関との比較では学歴取得が重要な要因になっている。

大学に入学する前の心配事について，大学での勉強を計画していた時（入学前)，どのような事を心配したかを4段階の尺度で回答を求めた。

その結果（表4)，肯定の比率（“非常に心配”“割合心配”の比率の和）が最も高かったのは，「学業と仕事を両立させること」が73.2%と最も高く，次いで「残業との兼ね合い」61.4%，「自分の学力に対する不安」59.4%，「外国語の学力」58.4%，「入学できるかどうか」50.5%，「卒業まで続けられるかについて」47.5%となっており，働きながらの進学であるために入学前の最大の心配事は仕事との兼ね合いについてであり，次いで学力（外国語を含む）の不安などがあげられる。他方，「家族の期待に応えられるかについて」13.8%，「会社の期待に応えられるかについて」18.8%などは大きな心配事ではない。

表4　入学前の心配事

心配事	非常に心配	割合心配	少し心配	心配なし	計
残業との兼ね合い	36.6	24.8	18.8	15.8	100.0
入学できるかどうか	24.8	25.7	29.7	16.8	100.0
学費の捻出	7.9	22.8	36.6	30.7	100.0
生活費をどうするか	5.9	18.8	18.8	54.5	100.0
家族の生活との調整	14.9	11.9	27.7	43.6	100.0
学業と仕事との両立	46.5	26.7	17.8	6.9	100.0
配偶者からの同意を得ること	8.9	5.9	7.9	71.3	100.0
職場の同意を得ること	12.9	20.8	26.7	34.7	100.0
体力（健康）の不安	14.9	20.8	17.8	44.6	100.0
卒業まで続けられるか	27.7	19.8	24.8	25.7	100.0
学力の不安	21.8	37.6	27.7	10.9	100.0
卒業後の就職	3.0	4.0	14.9	75.2	100.0
通学と通勤の時間	8.9	16.8	27.7	43.6	100.0
外国語の学力の不安	31.7	26.7	27.7	10.9	100.0
家族の期待に対する不安	6.9	6.9	20.8	62.4	100.0
会社の期待に対する不安	7.9	10.9	16.8	59.4	100.0

（単位：%、無回答は除く）

6　入学後の問題点

社会人が夜間主コースで勉強を続けていく上で大変な事は何かを4段階の尺度で回答を求めた。その結果は（表5），肯定の比率（“非常に困る”“割合困る”の比率の和）が最も高かったのは「自分のための学習時間を確保すること」（70.3%）で，次いで「授業のための学習時間を確保すること」（65.4%），「学業と仕事を両立させること」（62.4%）の3項目で，反対に比率が低かったのは「家族の生活との調整について」（18.7%），「会社から勉強することの理解を得ること」（21.8%），「通勤と通学にかかる時間」（22.7%），「出張があること」（22.7）などである。

夜間主コースの社会人の多くが，個人の意志によって入学を決定しており，会社から勉強することの理解を得ること自体はとくに問題はないが，学業と仕事を両立させることに苦心をしており，「学習時間の確保」が勉強を続ける上での最大

の問題点となっている。

大学で勉強することを計画していた時（入学前）の心配事が，「学業と仕事との両立」「残業との兼ね合い」など仕事との関係と「自分の学力に対する不安」「外国語の学力」など学力の関係であったが，入学前の心配が入学後には「学習時間の確保」として顕著に現れる。

表5　大学で勉強を続けていく上での問題点

問題点	非常に大変	多少大変	多少大変	問題なし	計
残業との兼ね合い	36.6	11.9	25.7	21.8	100.0
会社から理解を得ること	8.6	12.9	27.7	47.5	100.0
出張があること	5.9	16.8	33.7	41.6	100.0
学費の捻出	9.9	20.8	33.7	34.7	100.0
家族の生活との調整	8.8	9.9	20.8	59.4	100.0
授業の進度についていくこと	10.9	25.7	31.7	30.7	100.0
授業のための学習時間の確保	31.7	33.7	20.8	13.9	100.0
自分のための学習時間の確保	42.6	27.7	22.8	6.9	100.0
学習の場所の確保	6.9	13.9	18.8	58.4	100.0
専攻分野に取り組むこと	14.9	19.8	33.7	30.7	100.0
個別指導の時間の確保	12.9	20.8	25.7	36.6	100.0
学業と仕事を両立させること	30.7	31.7	22.8	11.9	100.0
通学と通勤にかかる時間	5.9	16.8	31.7	42.6	100.0

（単位：%、無回答は除く）

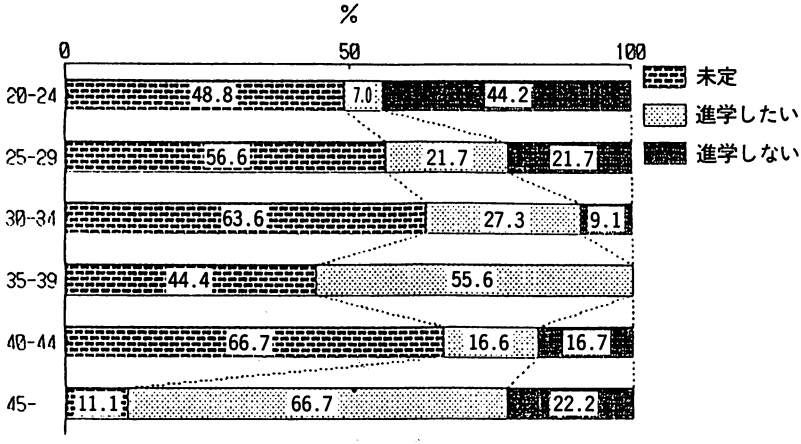
7　大学院進学の希望

卒業後引き続き福島大学の地域政策科学研究科へ社会人特別選抜での進学希望は，「未定」49.5%が半数を占めるが，他の半数は態度を明らかにしており，「進学したい」22.8%，「進学しない」27.7%であり，進学を希望する者は2割程度である[2]。年齢別（図5）にみると，30歳後半と45歳以上に進学希望者の割合が増加するという傾向がみられる。

進学を希望する主な理由は，「もっと深く研究してみたい」「社会福祉士の資格を取得したいから」「自分自身を成長させること」「大学院生活を体験してみたい」「将来への可能性を最大限に生かすため」など。

進学を希望しない主な理由は，「転勤があるため無理」「大学で学習したことを早く地域社会で発揮したい」「年齢的に無理」「興味がもてる研究分野ではない」「卒業後の予定は決まっており，進学したくなったら考える」「他の大学の研究科を目指す」など，特に転勤があるためを理由にあげる人はかなりの数に上り，それ以外では希望する研究分野がないという理由が多い。

図5　年齢×大学院への進学希望



n＝101

8　大学教育に対する満足度

大学教育に対する満足度は，「完全に期待したとおり」6.9%，「かなり期待に合っている」45.5%，「少し期待に合っている」35.6%，「期待どおりではない」7.9%と肯定的な評価は6割，否定的な評価は4割。

肯定的評価の理由は，「講義は非常に楽しい」「講師が熱心」「種々の年齢層の交友関係ができた」「一般教育は有意義であった」「大学に入らなければ学べない刑法の外書講読などがある」「自分自身で研究・調査し学習する所と感じた」「カリキュラムの面などで社会人のことをよく考えてくれている」「教官は非常に熱心」「講義内容もおもしろい，人との出会いがとてもすばらしい」など。

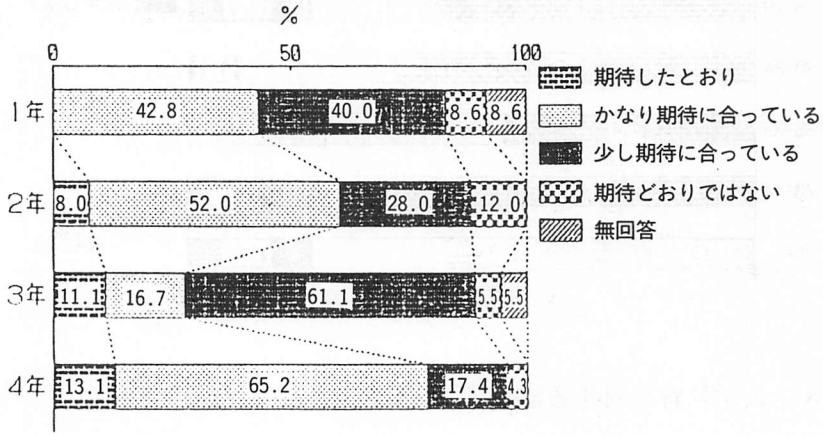
否定的評価の理由は，「必修科目が多く，学びたい講義があまり受けられない」「昼間主コースにあって，夜間主コースにない講義科目も多い」「科目選択が少なく，与えられたもので単位を取るための勉強になっている」「夜間のため図書館の利用が十分ではなく，教官との接触も思うようにはできない」「早いうちから専門

教科に取り組みたかった。1～2年次は一般教育科目が思っていたよりも多く，少し残念だった」「学生数の多い授業はうるさすぎる」「講義の内容が専門的，抽象的すぎる」などである。

肯定的評価の理由として授業内容・カリキュラムや教官の熱意など教育内的要因をあげ，否定的評価の理由は必修科目をめぐる問題や図書館の利用など制度的要因をあげているものが多い。

学年別に違いがみられ（図6），1年と2年に「期待どおりではない」とする比率が高く，3年～4年ではその比率が低くなり，逆に「期待したとおり」が高くなる。1年～2年の選択科目の少なさが期待を裏切っている原因でもある。

図6　学年×大学教育への期待



n＝101

9　おわりに

社会人特別入試で夜間主コースを目指すのは，入試に社会人への配慮があって教育内容や卒業資格が昼間主コースの学生と殆ど変わらず昼間の授業も受講できて学費が半分程度であり，働きながら学ぶ社会人にとって魅力的なコースだからである。

なぜ大学を選ぶのかでは，大学は学問のある一部分ではなく体系的に学べることに加え学歴（学士）が取得できるからであり，社会人の大学で正規に学びたいという欲求はきわめて強い。

大学が教育機関として，社会人が学問を体系的に学べ，学歴が得られるという

点で，他の種類の機関とは異なる役割を果たしており，社会人にとって重要な学問の場となっている。

社会人が仕事を持ち大学で学ぶ時の問題点は，仕事との兼ね合いであって，そのことは学習時間が確保しにくいという問題となって現れる。学習時間の確保は働きながら学ぶ学生の宿命的課題である。現在の技術革新のテンポが非常に早いため新しい技術や知識を学ぶことは企業側にもプラスに働く。企業や官庁の社会人学生に対する勤務時間への配慮や授業料等の財政的な援助システムの充実をはかることが望まれる。

そして大学側は，学生が大学教育の評価で否定的な評価の理由としてあげた，選択科目の少なさ，図書館の利用，昼間にあって夜間にない科目，教官との親密な接触などが今後取り組まなければならない課題であろう。

注

(1)　全国の国立大学のうち，19大学21学部で「昼夜開講制の夜間主コース」が設置され，大学によって授業時間帯，昼間コースの取得可能単位数，昼間コースへの転換可否などは異なる。福島大学の場合には昼間主コースへの転換はできない。

(2)　福島大学は経済学研究科と地域政策科学研科で社会人のための特別選抜を実施している。行政社会学部の関係では，地域政策科学研究科修士課程で，募集人員の半数を「社会人特別選抜」の枠にあてている。

本研究は，平成５年度～６年度にわたる文部省科学研究費助成（一般研究Ｃ）「社会人の学習要求に関する実証的研究」による研究成果の一部である。